

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520395

研究課題名(和文)ビルマ文学史における1940年代の研究～日本占領期文学から戦後文学へ～

研究課題名(英文)The research of 1940's in the streams of Burmese Literature

研究代表者

南田 みどり(Minamida, Midori)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・名誉教授

研究者番号：80116144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、期間中可能な限り収集した1945-49年出版の文学作品を読み込み、第一に、45年のビルマ文学が日本占領期文学を発展的に継承したことを、その書き手の陣容と作品の枠組みなどいくつかの側面から検証した。第二に、46-49年の文学にみられる新たな動向を、作家の陣容や作品の枠組みなどから解明した。第三に、この時代を代表する『ビルマ1946』(1949テインペーミン1914-78)の特異性を、同時代の作品群との比較において検証し、訳書も出版した。総じて、資料入手の困難な1940年代の戦後文学の全体像を把握することが可能となった。

研究成果の概要(英文)：I collected the literary works published in 1945-49 as much as possible, read them deeply, and achieved a measure of success as follows. First, the literary works published in 1945, especially fictions succeeded the same role as in Japanese Occupation, such as entertainment, satire, enlightenment, and propaganda. Most of the writers in 1945 had also been full of active in the Japanese Occupation. The new streams were rather found in non-fictions. Second, the new streams are found in the fictions published in 1946-49. Half the number of writers started to write after the War. Most of the fictions are non-political, such as mystery, humorous stories, and love stories. In short stories I found more description of the lives of ordinary people than in 1945. I also found in no small quantities the story of love and struggles such as anti-Fascism movement and independence movement. Few of them were influenced by the argument on the conception of class struggle in the literature in 1948-49.

研究分野：ビルマ現代文学

キーワード：ビルマ文学史 日本占領期 内戦 I抗日統一戦線 文学の階級性 抗日文学 検閲

1. 研究開始当初の背景

英領期、日本占領期(1942 - 45)を経て、英国支配の再開から48年1月の政治的独立達成、同年3月以降の共産党など反政府勢力・民族少数派などの武装蜂起による内戦と、未曾有の激動に直面したビルマの40年代は、文学史上でも、大きな変化をこうむった。

この時期については、現代史や政治学の分野で、内外に若干の蓄積が存在するが、文学研究は、内外とも十分な業績が不足してきた。

日本占領期文学は、南田みどり「ビルマ文学史における日本占領期の研究」(基盤研究(C)2009~2011 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(研究成果報告書平成24年6月7日)が、一定の研究成果をもたらした。南田は、日本占領期に出版された雑誌、単行本小説等を可能な限り収集して、第一に当時の文学が果たした役割をいくつかの側面から解明し、第二に作家協会機関誌『作家』の役割を考察し、第三にビルマ国内で活動した文学・出版関係者のリストと出版書籍のリストを作成し、今後の研究への布石とした。さらに、日本占領期の遺産である検閲制度の現代文学への影響についても考察し、総じてビルマ文学史上空白であった日本占領期の意義と位置づけを明確にした。

一方戦後文学では、ビルマ国内の文学史的叙述に概説程度の言及が散見された。それらは、45年以降「堰を切ったように」登場した抗日文学、抑圧される階級を解放する武器としての「新文学」「人民文学」を掲げる作家と、芸術のための文学を主張する作家との間で、40年代末に生じた文学論争などに主として言及するが、日本占領期の文学的潮流との連続性を論じる視点は皆無であった。

南田は、反植民地闘争を経て亡命地インドから抗日闘争を展開し、戦後はビルマ共産党書記長や閣僚を務め、文学の階級性をめぐる論争の牽引車的役割を果たした作家ティンペミン(1914 - 78)の思想や行動と、40年代文学のかかわりをも検証してきた。本研究は、その業績をも発展的に継承している。

2. 研究の目的

本研究は、上記の南田の研究成果の上に立ち、ビルマ本国において研究の蓄積が未だ十分ではない40年代文学について、日本占領期(1942 - 45)文学と戦後文学との連続性をとらえなおすことによって、ビルマ文学史における1940年代の役割を検証することを主な目的とした。

3. 研究の方法

ビルマでは2011年の「民政移管」後、2012年に出版物の検閲が解除され、2016年には野党の国民民主連盟が政権についたが、軍の実質支配は継続していた。したがって、現地とのやりとりには慎重を期す必要があった。

研究には現地での資料収集と聞き取り調査を不可欠とした。まず現地において45 - 49年出版物を、小説を中心に出来る限り収集し、資料の保存状態の悪いものは要点を書写す

する必要があった。

それらの実施に先立ち、収集済みの資料の整理、ならびに聞き取りのための問題意識の整理を行った。実施後は、収集済み資料の読み取りと聞き取り調査結果の整理を行い、それらを基に、まとめの論説を執筆した。

また文学史の流れを確認するために、現代文学への目配りも必要で、収集した情報を元に文学状況について論説を執筆し、さらに、現地作家・出版者の要請に応じて、日本文学と比較の視点からビルマ語論説を執筆し、資料となる作品の翻訳出版なども行った。

4. 研究成果

(1) 1945年のビルマ文学

文学状況

45年の出版界は三期に分類された。第一期は、45年5月の連合軍によるラングーン(ヤンゴン)制圧までの期間である。3月の抗日統一戦線パサパラ一斉蜂起の前後に、作家協会や東亜青年連盟など翼賛組織への監視がさらに強まったが、日本軍と傀儡政権閣僚が4月にラングーンを脱出すると、ビルマ語日刊紙『ミャンマー・アリン(ビルマの光)』『トゥリヤ(太陽)』、週三回刊の英字紙『Greater Asia』などが廃刊となった。

第二期は、8月の日本降伏までの期間である。降伏を待たずして出版界は始動した。5月に『ミャンマー・アリン』と、日本傀儡政権宣伝局発行だった『パマー・キツ(ビルマ時代)』が民間紙として再刊され、英国軍広報局も日刊英字紙『Rangoon Liberator』を創刊した。6月にマンダレーで、週二回刊のビルマ語紙『シュエーマンアウンシー(マンダレーの勝利太鼓)』が、ペゲー(バゴウ)ではパサパラ第四管区広報局の週刊ビルマ語紙『タイン・レー(第四管区)』が創刊された。7月には、マンダレーでビルマ語日刊紙『タインチツ(愛国)』が再刊され、ラングーンでは、英国軍広報局が週刊ビルマ語紙『キッティツ New Age』を創刊した。

第三期は、英国軍政から民政への転換期で、出版界の動きは本格化する。作家協会は、8月末に年次大会を開き、新執行部を選出した。同月、ラングーンで英字週刊誌(後に日刊紙)『Businessman』、バセイン(パテイン)で英国軍広報局による無料ビルマ語紙『シュエーマンタン(金の銅鑼の音)』が創刊された。9月にラングーンで、ビルマ語日刊紙『ランニョン・デイリー(道標)』と『ルツラッイエーFreedom』が創刊された。創刊は日本占領期をしのぐ勢いで相次ぎ、10月以降もビルマ語週刊紙2紙、英字日刊紙1紙、ビルマ語日刊紙6紙が発行された。

さらにビルマ語週刊誌『ジャーネージョー(卓越の週刊誌)』『ディードウ(ミミズクの種類)』の復刊、月刊誌『アシェタイン(東国)』、『ルードウ(人民)』や共産党機関誌『ピードゥ・アーナー(人民権力)』など週刊誌の創刊も相次ぎ、12月に月刊誌『トゥエータウ(血盟)』が創刊されて、短編・長編掲載

への道を開いた。

この4ヶ月余の出版作品を、日本占領期文学における文学の役割との比較で小説を中心に概観すると、以下ようになる。

フィクションその1 娯楽的役割

ビルマ側の資料では、日本占領期は文学史上「暗黒時代」とされ、文学が低俗な娯楽恋愛作品と日本軍のプロパガンダ作品に両極分解していたとの主張も見られたが、南田は日本占領期作品を読み込む中で、両者の中間に啓蒙・風刺作品が存在したことを明らかにし、当時の文学の役割を娯楽、啓蒙・風刺、プロパガンダに大別していた。日本占領期の延長線上にある45年出版作品も、便宜上この分類に沿って概観できる。

日本占領期の娯楽的役割の作品には、恋愛もの、ミステリー・冒険ものが見出せたが、45年作品には、『フィンリン(率直)邸』『ヤティーマン(適正カラット)商店』『人違い』(マハースエー1900-53)『恩人』(ミンマホー)『覇権』(ミヨマ・オン)など恋愛もの、『核スパイ』『ファシスト・タンタン』(ダゴン・シュエーミヤ 1895-1982)『真のタキン』(タンスイン)『ビルマの赤い血』(テツパン・アウンミン 1917-80)などミステリー・冒険もの他、『初夜権』(トゥリヤ・ウー・ティンマウン 1898-1966)『冒険者』(シュエーウダウン 1889-1974)など歴史もの、SFものの『核』(ウー・アウンミン)がある。

恋愛ものは日本や日本軍の描写が控えめで、恋愛をめぐる人間模様の複雑さに重点が置かれ、日本占領期作品と大差ないが、ミステリー・冒険ものは、日本占領期の枠組みを継承しながら抗日闘争取り入れて再生されたものが多い。

フィクションその2 啓蒙・風刺的役割

日本占領期の啓蒙的作品は、世相風刺的作品をも包括し、来るべき真の独立のためにビルマ人の意識向上を啓蒙する密かな抗日プロパガンダ的役割をも担い、寓意もの、悪漢もの、農村ものが見出せた。45年の啓蒙的・風刺的作品にも、『黄金富豪』(ダゴン・キンキンレー1904-81女性)『アパーの物語』(ザワナ 1911-83)『我権力者とならば』(メーミヨマウン 1910-98)など寓意もの、『崩壊時代の南京虫』(イエートウツ 1913-48)『ジープ・レディー』(トゥカ 1910-2005)『抱擁捜査』(シュエーア 1910-98)など悪漢もの、『九百万の主』(マハースエー前出)『黄金米』(ザワナ前出)など農村ものがある。その他女性への啓蒙もの『新時代娘』(マ・イーチェイン BA1915-2011女性)がある。

45年の啓蒙的・風刺的作品は、戦後復興・再建のためにビルマ人の意識向上に貢献する役割を担った。日本占領期に死の危険と背中合わせで書かれた密かな抗日プロパガンダとしての啓蒙的・風刺的作品からは、それなりの覚悟と吟味がうかがえたが、検閲からの解放による抗日プロパガンダの公然化が、45年作品の風刺の筆に磨きをかけたか否か

は、議論の余地があり、より多数の作品を対象とした検討が必要といえる。

「プロパガンダ」的作品のゆくえ

日本占領期文学には、大東亜建設や大東亜戦争遂行の意義を民衆に理解させて日本軍に協力させるよう導くプロパガンダ的役割が求められた。しかしビルマ作家は、その役割を全うせず、長編や短編にビルマ軍将兵を多数登場させ、ビルマ軍ものを世に出した。それはビルマ軍のプロパガンダ的役割を果たした。その中には、恋愛を中心とした娯楽的なものと、自己犠牲を称える滅私奉公的なものが存在した。

45年のビルマ軍ものには、抗日闘争に恋愛をからめた娯楽的要素が濃厚な『真の革命部隊員』(イエートウンリン 1910頃-62)『尊き精神』(ミヤミヨウルイン 1902-70) 事実を忠実に小説化した『愛国兵士の日記』(ターガヤ・ガ・ソウ 1915頃-98)『戦場と愛の水流』(マハースエー前出) 親子の葛藤をからめた『チツウーの夜』(イエートウツ前出)がある。

このほか、民間人ゲリラによる凄惨な抗日もの『回向は独立後に』(ミヤダウンニョウ 1915-83)『ゲリラ隊員』(ボンチュエー1921-48) 異色の政治小説『第三次世界大戦』(ミヨマ・マウン 1903-83)がある。

日本占領期に登場したビルマ軍のプロパガンダ文学は、45年に抗日文学として再生し、民間ゲリラの抗日ものも加えて、新たなプロパガンダ文学として戦後文学の一ジャンルを形成していくこととなる。

戦後文学に向けたさらなる歩み

次に、日本占領期作品に見出せず、45年作品に新たに生じた事象をまとめておきたい。第一に民衆の形象化がある。上述の抗日ゲリラとしての民衆像に加えて、『夜明け』(イエートウツ前出)『戦災』(シュエーペイントウン 1908-61)における戦争に翻弄される民衆像が見られる。戦争の否定的側面を強調する受難者としての民衆像は、日本占領期には公然と扱えなかったものである。

第二に、『共産主義娘』(ティンカー1909-97)の英領ビルマ正規軍人と女性共産主義者、『ゲリラ9号』(シュエードンビーアウン 1906-86)のカレン族女性ゲリラのように、日本占領期に「敵」とみなされ、形象化がはばかれた人物像が見出せる。

第三に、日本人の明確な形象化が見出せる。日本占領期には、日本及び日本人の姿は、風刺や啓蒙の若干の作品に漠然と描かれたが、顔と名前を持った日本人の形象化は見出せなかった。それらは上述の『ファシストタンタン』『ビルマの赤い血』『抱擁捜査』『夜明け』で残酷で下卑で色情狂の将校、『ゲリラ9号』で社会主義者の将校として登場する。

一方戯曲『新しい時代は明ける』(ティンペーミン)は、4人の典型的な日本人を描く。これは、44年に亡命先のインドで書かれ、英訳されて上演されたビルマ初の抗日文学で

あり、45年にビルマ国内で出版された。

第四に、『アピュー』(ジャーネージョー・ママレー1917-82女性)と『戦場と愛の水流』において、ビルマ軍人の否定的側面の描写が見出せる。前者は44年に執筆されて密かに回し読みされ、後者は日本占領期に出版許可が下りず、抗日部分を加えて出版された。

雑誌掲載短編14編においても、同様の傾向が見られた。そのうち3編が日本軍降伏以前の45年8月前半に出版されている。ビルマ戦後文学が日本軍降伏を待たずして始動していたことを物語る。

その他

このほか、日本占領期に見出せず45年文学で新たに登場した内容と傾向の翻訳作品とノンフィクションがある。翻訳は、『虹』(ワンダ・ワシレフスカ)『私の見聞』(エドガー・スノー)『ロシア地下革命基地』(ボリス・ランポールスキー)『ソビエトの戦争と青年尾時代』(ディアナ・レーピン)など、独ソ戦や社会主義教育に関するものである。

ノンフィクションには、第一に、『知による発展』(シュエーウダウン)『戦争は終わった、何をなすか』(ニャーナ1902-69)など、ビルマ人の意識昂揚を目指す啓蒙書がある。

第二に『愛児』(ウー・オンミン)『わが子』(ウー・ティンスエー1906-53)など、児童教育関係の啓蒙書がある。

第三に、『白書劇・ビルマ政治情勢』(ゼーヤマウン1913-2003)『総督が何を言おうと動じるな、アウンサンよ』(ウー・バイン1894-1977)『これは誰の勝利か』(アウティン)など、当代政治を論じるものがある。

第四に、『社会主義国家』(コウコウ1922-92)『ビルマと共産主義』(タキン・タンミヤイン)『実践共産主義』(タキン・ソウ1905-89)『当面の政治』(ティンペー、タキン・タントウン1911-68共著)など、共産主義関係のものがある。

第五に、“Three Years Under Japs”(キンミョウチツ1914-99女性)『日本の囚人』(タキン・ターイ)『パトゥー少佐』(タイソウ1920-2003)『赤軍のてがかり』(一抗日指導者)『「チッティー」がやったすべて』(イエトウエー)など、抗日闘争の記録がある。

45年文学の評価

45年出版のフィクションに関するビルマ側の評価は、詩人・作家・評論家のダゴン・ターヤー(1919-2003)が先鞭をつけ、後世にも影響を与えた。彼は、一部の45年小説の読後感を列挙して、一作を除き酷評した。彼の評価基準は、「新しい世界観」「新しい政治的潮流」「政治的見識」「新しい題材」の導入の有無であった。

彼にとって日本占領期文学は、占領期の終焉とともに唾棄すべきものであり、45年文学は復興とともに生み出されるべきであった。彼は、日本占領期を文学史上見るべき作品のなかった「暗黒時代」ととらえた。作家たちの「対日協力」は不問に付され、ビルマ文学

史上で日本占領期文学と戦後文学とのつながりは考慮されず、抗日文学など「新しい」題材と「政治的見識」を有する作品の登場のみが強調された。

45年におけるフィクションの書き手のほとんどが日本占領期に作家として活躍した者たちであった。彼らの作品が日本占領期における文学の役割を発展的に継承したのものとなったのは無理からぬことであった。

一方ノンフィクションや翻訳の訳者や著者には、日本占領期中断した執筆活動を再開した者が少なかった。日本占領期の枠組みからの新たな飛翔は、むしろノンフィクションの分野において顕著であったといえよう。(論文参照)

(2) 1946-49年のビルマ文学

46-49年の文学界

46年12月にダゴン・ターヤーが雑誌『ターヤー(星座)』を創刊した。彼は、古い文学を捨て資本主義体制を打破せよと唱え、「新文学」の創出を謳い、世界文学の進歩的潮流の紹介に努めるとともに、多くの新人作家を育てた。

47年3月に、デルタ農民の日本占領期の苦難を描く『ガバ』(マウン・ティン1909-2006)が出版されて、反響を呼んだ。6月には『シユマワ(見飽きず)』、7月に『パデーター(豊饒)』など、文芸誌の創刊も続いた。後者は、とりわけテットウ(1913-2002)ティンデー(1916-80)タードゥ(1918-91)など、政治性の希薄な作家たちの恋愛小説やミステリー小説を多数掲載した。雑誌の興隆は、さらに多くの新人作家を輩出した。同年8月には、タキン・ヌ(1907-95)を会長にビルマ文学振興を目指すビルマ翻訳文学協会が設立された。

48年1月に、ティンペーミンが文学は被抑圧階級解放の武器となるべきだと主張し、当代小説の多くが恋愛ものであり、現状では『ガバ』以外に優れた作品はないとしてさらなる論議を促した。テットウやティンカー(1909-97)は、文学における階級性の重視に反発して芸術性重視を説き、若手作家はティンペーミンの主張を支持した。

49年10月にティンペーミンはさらに、当代文学を、反動文学、新ブルジョア文学、人民描写文学、人民文学に四分して、詳細な批評と提言を展開した。彼はまた、ダゴン・ターヤーらの「新文学」派が新奇な文体や新造語の詩作に精力を傾けているとして、その「ゆきすぎ」を反人民的だと批判した。彼の提言はむしろ進歩的文学勢力内部に論争を呼び、それは50年代まで尾を引いた。

多様な小説の登場

46-49年作品の書き手の半数は、大戦後に小説の執筆を始めた。そして作品の半数以上は、政治性の希薄な作品であった。収集作品は、45年作品以上の多様化が見られ、その役割を娯楽、啓蒙・風刺、プロパガンダと三分することが必ずしも容易ではない。

第一に娯楽的な役割のものでは、『千五百の愛と命』(1947 ワズィヤー)「誤解するな」(1948 モウウエー1927 - 67)『戦いに勝つ宝』(1948 トータースエー1919 - 95)など、45年同様のミステリーものがある。

第二に、啓蒙・風刺的な役割のものでは、『サヨナラ』『総督』(1946 ザワナ前出)などがある。

第三に 45 年には見出せなかった『ゲイ』(1946 ミヤミョウルイン前出)「一本のブランデー」(1947 トータースエー)などのユーモアもの、『金では動かず』(1947 イエトウ前出)『ナイロン』(1949 タードウ前出)『お金』(1946 トウカ 1910 - 2005)『愛の借金は返せない』(1946 タンスエー1926 - 64)『しおれた一輪の花』(1949 ピエソン 1926 -)など、人情的恋愛長編がある。

第四に、45年作品以上に多様な階層の人生の断片を描く短編や中編が見られる。チョーアウン(1920 - 2000)、チーリン、ミヤタンティン(1929 - 98)らによる民衆の苦難を描く新文学派の短編、アウンソウ(1926 -)やマンティン(1916 - 97)による農村を舞台とした短編、スイートウ(1918 - 81)による人情的短編、テットウ(前出)による日常エピソード的短編、チーエー(1929 - 2016)キンソン(1925 -)マラー(1915 - 2001)など女性作家による短編も登場し、文学界は多様な作品に賑わった。

愛と闘争を描く作品

45年作品における娯楽的役割の恋愛ものやミステリー・冒険もの、プロパガンダ的役割の抗日・独立闘争ものが、愛と闘争を題材とする長編となって継承され、多数出版されたことも、この時期の大きな特徴である。

日本占領期の抗日闘争を中心とする作品には、『大臣の娘と』(1946 シュエーセツチャー1918 - 78)『英雄女性兵士』(1946 ヤンアウン 1903 - 94)『エーエー』(1945 ジャーネージョー・ママレー前出)『非情にあらざる』(1946 トーカ女性)などがある。

大戦後を舞台に独立闘争を描く作品には、『英雄同志』(1946 ヤンアウン前出)『愛する国』(1947 ティンデー前出)『紅蓮のキンピュー』(1948 ジャーネージョー・ソーウー1919 - 91)『甘い音楽』(1949 トウカ前出)『忘れない愛しい人よ』(1948 ミンシン 1927 - 86)『欲情の陽炎』(1946 マハースエー前出)『愛の粘り』(1949 同)『愛するのは困難』(1948 同)などがある。マハースエーは、未来小説『ぼくらの国あたたしたちの国』(1947)も書いている。

文学の階級性をめぐる論争を意識した作品には、『ボンマウンはただ一人』(1947 パモー・ティンアウン 1920 - 78)『さらば愛しき人』(1948 同)『マイン』(1949 ダゴン・ターヤー前出)『吸血悪神』『反乱者』(1949 同)などがあり、主要人物のせりふを通して左翼思想が導入される。

今回収集した 46 - 49 年作品には、45 年作

品に見られたような日本軍人やカレン族などの明確な他者表象は減少した。(論文参照)他者表象に関しては、さらに作品を収集し精読することが必要となる。

(3)『ビルマ 1946』とティンペーミン

成立過程の政治性

『ビルマ 1946』(1949 ティンペーミン)は、上述の分類では愛と闘争を描く作品に属する。しかしそれは、濃厚な政治性において、そしてデルタ地方の農村という限られた空間における複数視点による時代の再現において、他に類を見ない特異な存在である。

ティンペーミンのインドにおける抗日活動は、44年8月の抗日統一戦線パサパラ結成を促した。45年8月、彼はビルマ共産党書記長に選出されて、10月に帰国した。47年7月、彼は党書記長を辞任し、党政治局員兼パサパラ内の共産党代表となった。9月に彼は、第二次行政参事会の農業・農村経済担当閣僚に就任した。10月に同党は入閣を過ちとするインド共産党からの批判を受け入れた。パサパラは同党を除名し、彼も閣僚を辞任した。党は彼を45年8月以来の対英協調路線の過ちの責任者として再学習のため12月から6ヶ月の休党を命じた。

パサパラ除名以降の同党は、武装革命路線に傾斜するが、ティンペーミンは学習の結果、パサパラと同党の団結が重要であることを再確認した。47年、パサパラ総裁アウンサンの暗殺後、彼は変名で党批判を雑誌に投稿し、平党員に格下げされた。48年2月に同党は、武装路線に転じたインド共産党に同調した。内戦回避を模索する政府は、ティンペーミンに仲介の労を求めたが不調に終わり、3月に彼は離党を宣言し、同党は武装蜂起した。7月に彼は地上左翼や軍と左翼評議会を立ち上げ、和平に向けて動く。だが、評議会の一部がクーデターに着手し、8月に彼は連座で逮捕されて49年7月まで服役する。共産党員の女性教師と社会党員の軍人の愛を軸に左翼統一を訴える『ビルマ 1946』は、48年9月に獄中で完成し、49年5月に初版が、8月に二版が刊行された。

作品の政治性

この作品は、45年5月頃から同年末までの第一部、46年1月から同年9月末までの第二部、同年10月から47年5月頃までの第三部に分かれ、時間の流れに沿って展開する。

第一部で作者は、この時期の政治的重要局面を織り込む。それは第一に、共産党・人民革命党(後の社会党)の統合挫折であり、第二に、共産党の右偏による抗日・反英連続革命の挫折であり、第三に共産党と社会党の不和による大衆組織の分裂である。

第二部で作者は、植民地経済体制の復興がもたらす生活苦によるあらゆる階層の怒りが、46年9月のゼネストで頂点に達する過程に、恋人たちの昂揚や仲たがいや和解を織り込む。続いてアウンサンが大衆闘争による権力奪取を回避して英国と妥協したことへの

左翼勢力の落胆と、彼らの間に生じる更なる亀裂を提示する。

第三部で作者は、民族資本家や地主の接近によるパサパラの変質、激化する左翼の不和、反対派の投石による女性教師の負傷と党による恋人との交際禁止令、インド人部隊襲撃による農業労働者兄妹の死、武器隠匿の疑い等による農民指導者と社会党指導者らの逮捕など、登場人物に矢継ぎ早に試練を与える。次に作者は、登場人物を身近な問題で共同行動に向かわせ、一同の分断を画策する地主と対決させる。そして、パサパラ、社会党、共産党、人民義勇軍、カレン族による水田耕作闘争の成功で閉じる。

この作品は、それまでの彼の長編の枠組みを脱し、同時代の政治問題に正面から切り込んで、新しい小説の可能性を開き、作者自ら提唱した人民文学の範をも示した。それはまた、その後の民衆の過酷な運命を容赦なく描写する彼の同時代の短編と表裏をなす存在ともなった。(論文 図書 参照)

おわりにかえて～戦後文学への影響

戦後ビルマ文学は、日本占領期文学を発展的に継承した 45 年文学として出発し、46 - 49 年の文学論争とともに多様な作品を生み出した。こうした 1940 年代文学は、現代ビルマ文学の発展の基礎を築いた。

とりわけ文学論争は 1950 年代以降の文学に少なからぬ影響を与えた。作家たちは抑圧される階級解放のための文学を模索し続けた。しかし、1962 年の軍によるビルマ式社会主義体制の登場以降、文学への規制は強まる。1973 年採択のビルマ社会主義共和国憲法の言論表現・思想信条等の自由を定めた条項に基づき、75 年より事前検閲が始まり、79 年には事前検閲の手続きを詳細に定めた原則が発表され、抑圧される階級解放のための文学は、翼賛文学の枠組みの中でのみ存在を許されることになっていく。(図書 参照)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 14 件)

南田 みどり、1946 - 49 年のビルマ文学と『ビルマ 1946』、査読有、世界文学、No.124、(2016) pp.52-59

MINAMIDA MIDORI、Nejarme Solitude、査読なし、Ninn Si Pyu Journal, No.2, (2016), pp.88-96

MINAMIDA MIDORI、'Gabya'hudhi Japan Gabya Phytlapon、査読なし、Poetry Voice, No.6, (2016), pp.99-111

南田 みどり、「1945 年のビルマ文学」補遺～戦後文学に向けたさらなる歩み、査読有、世界文学、No.121、(2015) pp.105-114

MINAMIDA MIDORI、Htuhsann dhaw Japan Amyothamee Tayauk、査読なし、Hninn Si Pyu Magazine, Vol.2, No.2, (2015), pp.37-46

MINAMIDA MIDORI、Pheksit Monedaing htega Sarpay hnit Sarnezin Lawka、査読なし、Mula Hsone Mhat L'Album Des Beaux-Arts Magazine, No.2, (2015), pp.88-96

南田 みどり、検閲廃止のあとさき ビルマ文学この 4 年、査読有、世界文学、No.119、(2014) pp.110-114

MINAMIDA MIDORI、Phekhsit Monedaing htega Saryedhu Tayauk、査読なし、Hninn Si Pyu Magazine, Vol.1, No2, (2014), pp.25-34

南田 みどり、世界の文学教育 ミャンマー、査読なし、カスチョール、32 号、(2014) pp.36-38

南田 みどり、1945 年のビルマ文学～日本占領期から英領期へ～、査読有、世界文学、No.118、(2013)、pp.79-89

南田 みどり、世界の文学 ミャンマー長編はよみがえるか、査読なし、東京新聞、5 月 9 日夕刊、(2013) pp.7

MINAMIDA MIDORI、Ma Pan Khet I Ahmaza、査読なし、Daw Hnin Mya hnit Myimya sapay Htoug Louk ye, Lu San Hu Hsodhu, (2013), pp.9-12

南田 みどり、文学に見るビルマのデルタ農民『開けゆく道』から「裏切り者だと！」へ、査読有、世界文学、No.116、(2012) pp.60-71

南田 みどり、ビルマ報告 2009 - 2011 ビルマ風景と文学状況、査読有、世界文学、No.115、(2012) pp.56-61

[学会発表](計 1 件)

南田 みどり、文学状況に見るビルマ「民主化」のゆくえ、大阪民衆史研究会、2012.9.15、大阪教育会館(大阪府)

[図書](計 5 件)

南田 みどり、段々社、ビルマ 1946 独立前夜の物語、(2016) 280

MINAMIDA MIDORI、Moedwin Sapay, Ma Pan Khet Japan hma Badhapyanhsohdaw 21yazu Myanmarza Baunggyouk, (2016), 214

南田 みどり 他、古今書院、ミャンマー 国家と民族、(2016) pp.453 - 462

南田 みどり 大同生命国際文化基金、二十一世紀ミャンマー作品集、(2015) 264

南田 みどり 他、明石書店、ミャンマーを知る 60 章、(2013)、pp.185-187

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南田 みどり (MINAMIDA MIDORI)
大阪大学・言語文化研究科・名誉教授
研究者番号：80116144